

岐阜大学全学共通教育・岐阜県国際ネットワーク大学コンソーシアム共同授業 「岐阜県方言のしくみを学ぶ」の問題点と改善の方法

How to ameliorate a cooperative program for the General Education of Gifu University
and the Gifu Prefectural International Network University Consortium

山田 敏 弘*
YAMADA Toshihiro

1. はじめに

平成16年度より岐阜大学全学共通教育(教養教育)科目として新規開設した「岐阜県方言のしくみを学ぶ」は、平成17年度前期、岐阜県国際ネットワーク大学コンソーシアム(以下、INUC (= International Network University Consortium) と略)の共同科目として提供されることとなった。

当該科目は、ダニエル・カール氏など著名人3名によるゲスト講義という機会が得られた点で授業としても利点があった反面、授業準備・授業運営ともに負担が授業者個人に大きくかかったことに加え、インターネット経由で行える授業の法律上の問題点が決定的要因となり、単年度で破綻することとなった。

本考察は、授業担当者として、授業準備過程ならびに実際の授業期間において、どのような問題点を見だし、どのように解決を模索して、どのような要因により失敗したかを振り返り、その考察を通じて、今後、同様の講義を行う機会がある場合に多くの関係者の理解を得ることを期し、また、同様の講義を担当する他の講師がよりよい環境で講義を行えることを願いながら、まとめるものである。

以下、第2節で、授業がどのような枠の中でどのように行われたかを振り返った上で、第3節で、問題点を整理し改善への提案を簡単に行っていく。

2. 授業形態

2.1 INUCの授業分類

INUCが提供している授業には、共同授業科目と、単位互換開講科目がある。

どちらも担当大学の主会場からサテライト会場へライブ配信されたり、インターネット経由で県内18の参加大学にオンデマンド配信されたりすることで、主会場以外でも受講可能である点で共通点がある。

共同授業科目は、平成16年度まで、潤沢な資金があり、いくつかの大学の担当者にまじって著名人も登壇する複数の大学が共同で担当する科目としての意味合いが強かった。具体的に、平成16年度後期には、精神科医香山リカ氏や俳優の三田村邦彦氏などの有名人が綺羅星の如く登壇する「人間福祉学」が開講されており、筆者の講義と同時期に開講された岐阜経済大学を主会場とする「NPOコミュニティ論」においても、主会場の担当教員が6回の講義を担当し、残りを、岐阜大学の教員(2回)のほか多くの参加大学外の講師を登壇させるという形態であった。つまり、「授業担当者」は、コーディネ

* 岐阜大学教育学部国語教育講座

ネットこそすれ、実際の授業はことばこそ悪いが「楽ができる」性質のものであった。

一方の単位互換開講科目は、それぞれの大学の担当者が通常の授業を、前述のライブ配信あるいはオンディマンド配信によって、学外の受講生の受講を可能にするシステムである。

平成17年度前期、筆者が担当した「岐阜県方言のしくみを学ぶ」は、3回のゲストスピーカーの講義以外を筆者が担当するという、いけば共同授業と単位互換開講科目の中間的な性質の授業であったものの分類上は共同授業に位置づけられた。このINUC側の2分類は、すなわちインセンティブ経費の付け方にも大きく関わっていた。ほかの大学の教員などが多くを担当し実質的に担当者の負担が小さい共同授業はインセンティブ経費がつかない反面、単位互換開講科目については一律の経費のほかには受講生1人あたりの経費がつくという扱いであった。

2.2 授業配信システムと資料作成に関連した問題への対応

2.1でも述べたように、当該授業は、ビデオカメラで撮影された授業者を含む授業風景と、授業時に提示されるパワーポイントで作成した資料とを、ストリームオーサーというソフトを使用して1つの画面にまとめ、インターネット回線を通じて、同時中継ならびにインターネットのサーバーに保存しオンディマンド配信される形式のものとして企画されていた。このため、当初、著作権法への抵触がいちばんの問題となった。

通常の設定された受講者に対して行われる大学の授業であれば、どのようなテレビ番組を視聴させても、それは法律に触れることはない。今回も、NHKが1999年から2000年にかけて作成した「ふるさと日本のことば」等、何点かのテレビ放映された映像を視聴させる予定を含めていたが、サーバーに保存した映像を他大学の学生がオンディマンドで受講するというシステムでは、このような映像の保存が問題となる可能性も出てきた。NHK岐阜放送局を通じてNHKにこのような授業でのNHK著作物の使用は可能かとの打診を行ったが、これは現行著作権法の上では不可能なことであった。

授業者自身もそのことを認識していたため、INUC側から提示された著作権法については授業者が責任を負うという内容の誓約書への署名を保留し、INUCにはより問題になりにくい方法の模索を依頼した。結果として、オンディマンド配信などサーバーに一定期間についても置いておくような方法は取らず、各大学での受講については、一定期間しか見られない形で制約をかけたCD-ROMを受講生に直接貸与し、受講生しか内容を見られないような方式によって行うことへと変更がなされた。

資料に関しては、DVDで頭出しを容易になるよう編集した動画のほか、音声教材も多く用いた。複数の映像再生装置は、教室内で切り替えられた。

すべての資料はパワーポイントで作成された。これは、前述のストリームオーサーというソフトで配信するために不可欠であった。また、パワーポイントで作成された資料は、画面が小さくなりモニターを通じて視聴されることを最大限考慮し、青地に黄色の文字を基本に、あまり小さくならないように配慮された。

教室内では紙の補助資料も配付した。INUCの社会人受講者(2.3節参照)には、パワーポイントの2枚/頁に印刷された資料も配付された。学外受講者に対しては、同様の資料がCD-ROMから取り出されるように工夫されているとの話であった。

2.3 受講者とそのサポート態勢

今回は、岐阜大学の教養科目として受講した学生が144名、岐阜大学以外の参加大学から19名、さらに社会人の聴講生が20名、合計183名の受講申請があった。

岐阜大学の学生は共通教育棟の講義室で受講し、同じ教室には社会人聴講生数名も常時参加していた。

19名の岐阜大学以外の学生のうち、岐阜大学の参加申込み受付期間内に登録したのは数名で、登録

期間を過ぎてから特別に受講を許可したものが十数名と、各大学での受講申請期間のずれによって特例を認めざるを得なかった。

授業にはINUCからの費用で授業補助の学生4名(教育学部4年生3名, 2年生1名)がついた。4名のうち2名は常にテレビカメラ操作とストリームオーサー処理にかかり, 他の2名が配布物の適切な配布や学習指導など, 教室内のさまざまな補助をおこなった。授業外では, これら4名うち1名がパワーポイント作成に, ほかの1名が(講義期間後半から)授業アンケート処理の補助をしてくれた。

岐阜大学の受講者については, AIMS-GIFUというインターネットによる学内専用の授業サポートシステムを用いて, 主にパワーポイントスライド用に作成したカラー資料の追加配布等を行った。INUCを通じて受講した岐阜大学以外の学生と社会人聴講生には, 別にINUCのインターネットサポートシステムを通じて, 資料配付のほか, 授業に関するアナウンスの徹底や個別の相談に対応した。

2.4 「岐阜県方言のしくみを学ぶ」の授業内容

今回, 筆者が担当した「岐阜県方言のしくみを学ぶ」では, 次のような半年間の予定を組んだ。授業は2005年度前期, 水曜1限, 岐阜大学全学共通教育棟101教室で行われ, 教科書には, 山田敏弘(2004)を使用した。

回	月日	教科書	文法	トピック
1	4月13日	なし	イントロダクション	
2	4月20日	§1	断定、推量、疑問	ダとヤ、語末有声子音の無声化、DA. YO. NE.
3	4月27日	ゲスト	ダニエルカール	外国人のみた方言と外国の方言
4	5月11日	§2	疑問詞疑問、依頼	アクセント、童戯ポコペン、英語の方言
5	5月18日	§3, 4	否定・働きかけ	学校の方言、擬音語・擬態語
6	5月25日	§5	音便	省略ことば、ピンクいなどの形容詞
7	6月1日	§6	原因・理由	母音三角形と連母音、飛騨方言の歌
8	6月8日	ゲスト	荒木優騎	飛騨の方言
9	6月15日	§7	アスペクト	撥音添加、ありがたいの場面差、可児弁
10	6月22日	§8, 9	補助動詞・依頼2	育児語、沖縄方言(歌、桃太郎)
11	6月29日	§10, 11	とりたて・接続助詞	名古屋方言と岐阜方言の違い
12	7月6日	§12, 13	判断・否定2	民間語源、美濃仁輪加
13	7月13日	ゲスト	松本修	全国方言の分布とタレントが広めたことば
14	7月20日	§14	ヴォイス	有標と無標、ら抜き言葉、自動詞
15	7月27日	§15	尊敬語//テスト	

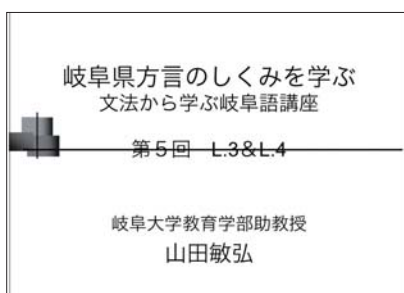
表1 授業予定

ダニエル・カール氏は山形方言を話すアメリカ人で, 国際交流のほか子育てなどの著作物も多くもつ芸能人である。荒木優騎氏は, 飛騨市古川の出身で, 飛騨が舞台となったNHK朝の連続テレビドラマ小説「さくら」に役者兼飛騨方言指導として活躍された俳優である。松本修氏は, 大阪の朝日放送で多くの番組を手がけてきたプロデューサーで, 中でも「探偵! ナイトスクープ」内で「全国アホ・バカ分布図」という方言に関する話題を取り上げ, 自身も芸能関係の著書を数冊もつ。

このようなゲスト講師の登壇を, おおよそ1ヶ月に1回ずつはさみ, そのほかの時間に筆者が通常の授業を行うという変則的なパターンとして実施された。

授業はおおよそ予定通り進んだ。

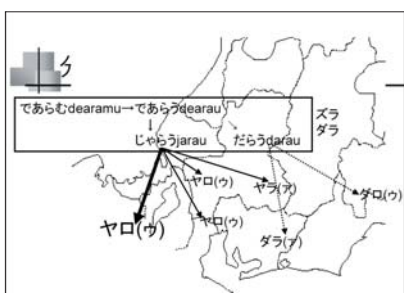
2.5 具体的な授業内容



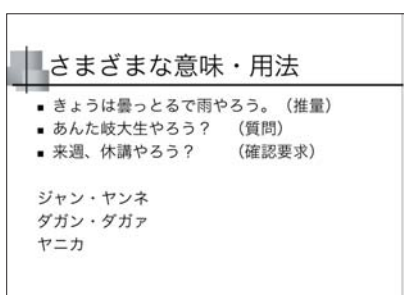
今回、行った授業の内容をより深く理解してもらえよう、1回分だけではあるが、授業の流れをパワーポイントの資料(実際の資料はカラー)と共に載せておく。以下は、第5回の授業(2005年5月18日開講)の様子である。

第5回の授業は教科書『みんなで使おっけ! 岐阜のことば』から第3課(文法項目としては否定)および第4課(文法項目として依頼・禁止)を使って行われた。

まず、前々回の宿題としてあった方言観察「ヤロ、ヤラ、ダロ、ダラのいずれを使うか、身近な人に聞いてくる」に関し、学生および社会人受講生のアンケート約140名分を入力した資料をpdfからjpegに変換しパワーポイントにはりつけたスライドを提示した。この入力には実質的に数時間の入力時間を要したが、参加学生が書いていることを確実に授業者は見ていることを示すためには必要なこととして行った。IN UC経由で受講している他大学生からの情報は、時間的に間に合わなかったため入れていない。

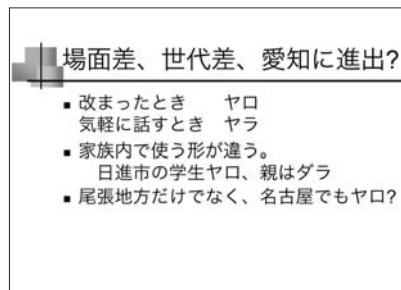


愛知県との対応で分かりやすく示すために、ヤロ、ヤラ、ダロ、ダラの4形式をまず取り上げた。違いは、岐阜県岐阜および西濃地区がヤロ、中濃・西濃地区がヤラ、愛知県尾張地方がダロ、愛知県三河地方がダラと大まかに分けられる。左のスライドはその変化の流れを示したものであるが、この一枚のスライドを作るためにもまた多くの労力を要した。結果として1枚のスライドになるものであっても、その話をするときには、話の順序に合わせた矢印ならびに字句の提示が必要である。1枚のスライドで提示した上で、それを指示棒等によって示しながら説明するという方法もあるが、遠隔で受講している学生には指示棒が果たして十分に見られる大きさで画面に表示されるか疑問もある。もし画面が小さいなどの条件であれば、スライドの中で提示されている部分が話に合わせて提示される方法のほうがベターである。ベターであるとわかっていれば、それをスライドの中に作り込むべきであろう。



ほかに、発展的内容として、共通語の「だろう」の周辺的な用法を提示し、それらがすべて方言形としてのヤロに相当するわけではなく、さまざまな形として表れることを提示した。このような情報は学部の各論でも十分理解されるかわからないところではあるが、発展的内容として盛り込んだ。

学生から得られた情報については、皆で共有することによって還元することに努めた。愛知県内では、一宮など美濃地方に近いところで指定辞ヤが用いられることがわかっていたが、それ以上にヤロが(岐阜大学に通う学生に限るかもしれないが)、ダロと比較した場合の音の相対的な柔らかさからか、広まっていることが分かったことは、大きな収穫として共有されることとなった。



そのほか、いろいろな得られた情報を返し、一方で質問にも答えていった。おおよそここまでで20分はかかったであろうか。このようなパワーポイントを用いた授業は大変であると言うと、授業の実

態を知らない人には、「一度作れば何度でも使えるでしょ」と言われるが、生身の学生を相手にしていれば、もちろんすべてではないが、**毎年作り替えたり、作り直したりする部分は少なくない**。このような授業の実態が、一部であれ授業実施をサポートする側にも十分理解されているとは思えなかった点が残念であった。

そのほか

- 島根では「ダロウ」
- 岐阜のどこ？ 愛知のどこ？
- 紀宮さんの「はばかり」
⇒ 方言には古語の残滓
- 「くる」の語源ははっきりしない。
⇒ 日本国語大辞典を見よう
- 「すまんなお」と「すまんのう」
- 社会基盤工学科のひとり・名前無し。

前回授業のフィードバックが終わると、いよいよ今回予定されているセクションに入る。

会話 昨日

まさる：さんの一の宿題やった？
ゆうた：ううん、やらへんかった
さんの一は、おじさんとこ行ったんや。
それで、やるひまあらへんかったんや。

先 生：宿題はやったかね。
ゆうた：すみません。
先 生：なんでやらなんだの？ **すぐに**
ゆうた：さんの一は、おじさんとこで法事があったんや。
学校から帰ってちやっ行って、10時に帰ってきたんや。
お父さんが「まーえーわ」って言ったし、**もういいよ**
先 生：法事やったんか。そりゃえらかったなあ。**たいへん** **だった**

会話は教科書のをパワーポイントでも提示した。
最初に模範リーディングを行い、そのあとに教師の読みに続いて復唱させた。方言で特に重要な音声的な特徴を、受講者にも実践してもらうことを重要なことと位置づけた。外国語のように岐阜方言を学ぶというコンセプトを貫いた。

「えらい」～分布

- 広範囲に分布
- 「しんどい」
- 意味のずれ
- 状態
 - 辛い(体・心...)
 - だるい
- 原因
 - 動作(労働、運動...)
 - 病気・片思い
- 羨望

学研『新・レインパー方言辞典』より

方言	意味	読み	読み
北海道	だるくない	福井	えらい
青森	だるくない	新潟	えらい
岩手	だるくない	山梨	えらい
山梨	だるくない	長野	えらい
長野	だるくない	岐阜	えらい
岐阜	だるくない	愛知	えらい
愛知	だるくない	三重	えらい
三重	だるくない	滋賀	えらい
滋賀	だるくない	京都	えらい
京都	だるくない	大阪	えらい
大阪	だるくない	和歌山	えらい
和歌山	だるくない	奈良	えらい
奈良	だるくない	徳島	えらい
徳島	だるくない	香川	えらい
香川	だるくない	高松	えらい
高松	だるくない	愛媛	えらい
愛媛	だるくない	高知	えらい
高知	だるくない	福岡	えらい
福岡	だるくない	佐賀	えらい
佐賀	だるくない	熊本	えらい
熊本	だるくない	大分	えらい
大分	だるくない	宮崎	えらい
宮崎	だるくない	鹿児島	えらい
鹿児島	だるくない	沖縄	えらい

続いて重要単語の意味の解説を行った。今回は特に岐阜や愛知の方言として重要な

「えらい」を、他の地域の同義表現と対照することで、全国分布を見ていった。

本来であれば地図がほしいところであるが、地図はなかなか提示しにくいものである。白黒の地図をカラーに加工する場合については後述するが、まずは地図をどこかから探してきて、スキャナーで取り込んで、適当な大きさに加工してなどという手間も、文字で書いてしまえば簡単に思えるかもしれないが、実際にはそうではない。カラー版の方言地図は一部にネット上で後悔されているものもある¹が、ほしい地図がない場合も多い。今回は、小学生用の方言辞典等から見えそうな表を見つけて使うことで間に合わせた。

「えらい」～用法の分析

- 共通語の「偉い」= 属性形容詞
- 岐阜方言の「えらい」= 感覚形容詞

1. あの仁はえらい。(三人称主語)
⇒ 必ず属性形容詞
感覚形容詞なら「～そうや」(これは多義)
2. わっちはえらい。(一人称主語)
⇒ 社会通念から考えて、属性形容詞

「えらい」に関しては、よく共通語で『『偉い』かと勘違いする』ということが言われるが、実際には主語の違いから分かるべきところもあり、単に同音語であるというだけではない使い分けについても解説を行った。

会話

まさる：さんの一の宿題やった？
ゆうた：ううん、やらへんかった
さんの一は、おじさんとこ行ったんや。
それで、やるひまあらへんかったんや。

先 生：宿題はやったかね。
ゆうた：すみません。
先 生：なんでやら**えらい**の？
ゆうた：さんの一は、おじさんとこで法事があったんや。
学校から帰ってちやっ行って、10時に帰ってきたんや。
お父さんが「まーえーわ」って言ったし。
先 生：法事やったんか。そりゃえらかったなあ。

基本的な語彙が理解されたところで、会話文をもう一度読む。そして、内容の理解を深めつつ、同じような文末表現が使われているところを指摘させ、次に文法事項を考えていく。今回は、否定表現の「へん」と否定過去の「なんだ」を取り上げた。ここまで説明してなかったが、本文は遠隔授業でもっとも見やすいと考えられている黄色系統の色で、地は濃い青をベースにスライドを作っていた。このような配色については、すでに別稿 山田敏弘他 (2005) で述べてあるのでそちらを参考にされたいが、この組み合わせで配色を行うと、強調したい箇所をハイライトすることは容易ではない。黄色の字をオレンジ色など黄色に近い色を使っ

ても、黄色との違いが画面上はあまりはっきりしないこともある。また、地のほうを水色などの近似色に変えると文字が浮かび上がりにくくなる。結局、今回は、水色の長丸四角をアニメーションで会話の背景に配置できるように作成した。

1 http://www2.kokken.go.jp/~takoni/map_archives/map_archives_index_J.htmなど

この課で学習する文法項目の第1は、否定表現である。一番左のスライドは補助の学生に作成してもらった文章を用い、それに対象の改変を加えて作ったものである。関連して、過去の調査から得られていた「へん」のおおよその分布を、Illustratorを用いて地図上に分かりやすく表示し、それをPhotoshopでjpegに加工して切り取ったものが真ん中のスライドの図であるが、スライドとしては、さらに分布状況をおおよそのことばにして示した。もちろん、中濃、西濃、岐阜と3段階のアニメーションつきである。さらにいちばん右のスライドでは練習問題を、最初問題だけが表れるようにし、クリックすると答えが表れるような加工をして提示した。これも補助の学生が工夫をして作ったものである。

<p>1. 「～ん」「～へん」 ～動詞の否定形</p> <p>(1) 名前書かん/書かへん (名前を書かない) (2) 太るで食べへん/食べ()へん (太るので食べない) (3) ちっとも勉強しん/しへん (全く勉強しない) (4) あしたはこん/こへん (明日は来ない)</p> <p>動詞を否定する場合に「～ん」を使用 中濃 西濃地方 → 「～へん」を使用</p> <p>*勧誘する際にも使用 Ex 今日来んか来へん?</p>		<p>練習問題</p> <p>① 連絡帳、出す → 連絡帳出さへん。</p> <p>② あの学校、受ける → あの学校受けん。(受けへん)</p> <p>③ 宿題、する → 宿題しん。(しへん)</p> <p>④ 誰も、来る → 誰も来ん(来へん)</p>
---	--	--

上の3枚を取れば、真ん中のスライドのみが授業者の手によってすべて作られたものであり、ほか左右の2枚は作業補助の学生が工夫をしながら作ってくれたものである。スライドに関していえば、真ん中のスライドこそ補助できる学生がいてくれると助かる部分であるが、この件については後述(3.1節)する。

第2の文法項目、否定過去の言い方についても、ほぼ同様の方法で提示し(左)、練習問題を行った(中央・右)。

<p>2. 「～なんだ」「～んかった」 「～へなんだ」「～へんかった」</p> <p>(1) テストで名前書かなんだ/書かんかった 書かへなんだ/書かへんかった (テストで名前を書かなかった。)</p> <p>「～んかった」 → 否定過去形 「～ん」 → 「～なんだ」「～んかった」 <small>若年層が使用</small> 「～へん」 → 「～へなんだ」「～へんかった」</p>	<p>練習問題</p> <table border="1"> <tr> <td></td> <td>～なんだ</td> <td>～んかった</td> <td>～へなんだ</td> <td>～へんかった</td> </tr> <tr> <td>書く</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>食べる</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>来る</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>する</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>		～なんだ	～んかった	～へなんだ	～へんかった	書く					食べる					来る					する					<p>練習問題 解答</p> <table border="1"> <tr> <td></td> <td>～なんだ</td> <td>～んかった</td> <td>～へなんだ</td> <td>～へんかった</td> </tr> <tr> <td>書く</td> <td>書かなんだ</td> <td>書かんかった</td> <td>書かへなんだ</td> <td>書かへんかった</td> </tr> <tr> <td>食べる</td> <td>食べなんだ</td> <td>食べんかった</td> <td>食べへなんだ</td> <td>食べへんかった</td> </tr> <tr> <td>来る</td> <td>来なんだ</td> <td>来んかった</td> <td>来へなんだ</td> <td>来へんかった</td> </tr> <tr> <td>する</td> <td>しなんだ</td> <td>しんかった</td> <td>しへなんだ</td> <td>しへんかった</td> </tr> <tr> <td></td> <td>せなんだ</td> <td>せんかった</td> <td>せへなんだ</td> <td>せへんかった</td> </tr> </table>		～なんだ	～んかった	～へなんだ	～へんかった	書く	書かなんだ	書かんかった	書かへなんだ	書かへんかった	食べる	食べなんだ	食べんかった	食べへなんだ	食べへんかった	来る	来なんだ	来んかった	来へなんだ	来へんかった	する	しなんだ	しんかった	しへなんだ	しへんかった		せなんだ	せんかった	せへなんだ	せへんかった
	～なんだ	～んかった	～へなんだ	～へんかった																																																					
書く																																																									
食べる																																																									
来る																																																									
する																																																									
	～なんだ	～んかった	～へなんだ	～へんかった																																																					
書く	書かなんだ	書かんかった	書かへなんだ	書かへんかった																																																					
食べる	食べなんだ	食べんかった	食べへなんだ	食べへんかった																																																					
来る	来なんだ	来んかった	来へなんだ	来へんかった																																																					
する	しなんだ	しんかった	しへなんだ	しへんかった																																																					
	せなんだ	せんかった	せへなんだ	せへんかった																																																					

教科書には本文、文法項目のほか、方言に関するさまざまな情報も盛り込まれている。本課では、学校で使われている方言について取り上げた。学校の方言の中には、方言とあまり意識されていないものもあり、B紙(ビーシ)は、この地域出身の学生にとっては、方言であると知って驚きの声が聞かれるものの1つである。

学校の方言	
■ B紙	・模造紙・大洋紙・とりのこ紙、がんび...
■ ケッタ	・チャリとの造語力の違い ・△ケッタ通 ○チャリ通 ・×原ケッタ ○原チャリ
■ ペーシ	・ドッチボール、ティーバック...

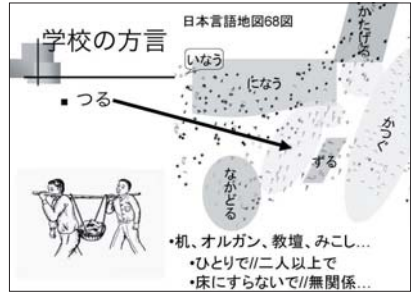
今回は、口頭のみでB紙の由来、A版紙とB版紙との違い、共通語の「模造紙」の由来、そして全国に見られる同様の「模造紙」の方言についてその由来を合わせて解説した。

ほかには自転車を表すケッタを紹介し、語源説なども解説した。重要なこととしては、ただ、ケッタとチャリを単語として比較するだけでなく、ほかのことばとの複合語についても考えることで、単に「方言語形がある」という知識から、「それらはどう違う」と考える癖を付けてもらうことを目指した。

また、「ページ」を表す「ペーシ」については、語末有声音が無声音になるという現象を、ドイツ

語に敷衍させて解説した。また、「ペーシ」と共通語でよく生じる「ドッチボール」「ティーバック」などの現象との違いが、摩擦音と破裂音という調音様式にあることも考えさせた。

続いて、学校の方言の代表格である「机をつる」を、「つる」「ずる」という東海地方の方言語形の分布図を、近隣地域に分布する形式と比較しながら解説した。右の図は国立国語研究所編による『日本語地図』からの部分である。『日本語地図』は、①大判過ぎて広域分布がスキャンできない、②地図記号はカラー



であるが色が薄すぎてスキャナーで読み取ると薄れてしまう、③県境の線もまた薄くまったく写らないこともある等の問題点がある。方言研究者はだいたい自前で簡略地図を描くようであるが、このような地図作成の際には多く、国立国語研究所から提供されているIllustrator用プラグインが利用されているが、これはMacintoshでは使えないという、大きな難点がある。今回は、中部および近畿地方についてスキャナーで読み取り、県境は示せないがおおよその海岸線で一を理解してもらいながら、薄い記号の色は色の透明度を上げた図形で示すことで、正確ではないがおおよその分布を理解してもらった。



岐阜県内の分布図については、自前でIllustratorを用い描いている。右の地図は「漢字ドリル・計算ドリル」の省略パターンの地図である。これはテキストに載せるためにもともと白黒で描いたものを、すべて一からカラー化していったものである。教科書にも載せてはあるが、追加データがあったことにより、やはり地図も作り直さざるを得なかった。



ゲスト講師が3回分入るため、今回は2課同時に行うことを試みた。以下の4枚のスライドは教科書の内容であり、授業方法としてはすでに述べたとおりなので、スライドだけを挙げ、内容は省略する。また、文法解説についても、1以外の3項目を省略する。

会話	ものすこい	ものすこく
さとし: 今度の日曜、一緒に名古屋行かへん?	りょう: えーよ。なう柴行こっけ。	母親: 名古屋はものせん人やで気をつけやーよ。
りょう: りょうくん、だんだ、はえーりやー。	祖母: かたまでしずみやーよ。あんましうめやーすなよ。	お風呂
つかる: めるいーとかぜひいてまうで。	あつ! まつと水入れよ。	
りょう: そーも、うめんさんなて。	祖母: ごぶれーしました。	そんなに
りょう: な か、そみそみしるわかぜひいたかなあ。	失礼しました	寒気がする

会話	ナ(イ)コヤ
さとし: 今度の日曜、一緒に名古屋行かへん?	りょう: えーよ。なら柴行こっけ。
母親: 名古屋はものせん人やで気をつけやーよ。	りょう: りょうくん、だんだ、はえーりやー。
祖母: かたまでしずみやーよ。あんましうめやーすなよ。	めるいーとかぜひいてまうで。
あつ! まつと水入れよ。	りょう: そーも、うめんさんなて。
祖母: ごぶれーしました。	りょう: なんか、そみそみしるわかぜひいたかなあ。

会話
さとし: 今度の日曜、一緒に名古屋行かへん?
りょう: えーよ。なら柴行こっけ。
母親: 名古屋はものせん人やで気をつけやーよ。
りょう: ただいま。でーれー疲れた。
祖母: りょうくん、だんだ、はえーりやー。
かたまでしずみやーよ。あんましうめやーすなよ。
めるいーとかぜひいてまうで。
あつ! まつと水入れよ。
祖母: そーも、うめんさんなて。
りょう: ごぶれーしました。
なんか、そみそみしるわかぜひいたかなあ。

1. 「～へん?」「～っけ」	～動詞
(1) 高山行かへん? (高山に行かない?)	「～へん?」 → 動詞表現【やや】等
(2) 一緒に行こっけ。(一緒に行こよう。)	「～っけ」 → (少し強め) 「食べる」「する」 → 「～よっけ」に変化 Ex 食べよっけ、しよっけ...
(3) はよ行こまい。(早く行きましよう。)	「～まい」 → 老年層が使用 (若年層 → 「めえ」)

この課では、文法事項の他に方言の擬音語・擬態語(オノマトペ)についても解説を行った。本当であれば地図も示したいところではあるが、今回は2課分をはしょって行わざるを得なかったことで、簡単に示すにとどめた。今回のような2課分を1回の講義中に行うことは、教科書を買ってくれた学生たちに対し、内容を解説する責任があると考えたためであったが、実際には消化不良になることも予想された。

オノマトペ	方言のオノマトペ
<ul style="list-style-type: none"> ■ 先がとがった鉛筆 ■ つんつん ■ とんとん ■ つくんつくん ■ びんびん... 	ぞみぞみ
	しかしか
	こべこべ
	だーだー
	しばしば...
	ほかには⇒p.97
	とんとん 軽い：重い どんどん とん(と) 一回：複数回 とんとん

さて、アンケートです。

- 今日は2課分、急いでやりました。
教科書を買ってもらったので、なるべく多くの課を勉強してもらいたかったからです。
その分、じっくり話ができませんでした。

みなさんはどちらですか。

1. やらない課があってもゆっくりがいい
2. なるべく多くの課をやってほしい

今週の方言観察

- きょう習ったオノマトペを使ってみよう。
- さらに珍しいオノマトペを集めてみよう。(聞いたらすぐにメモ)

そこで、率直に手を挙げてもらい、結果として、以降、毎回1課をゆっくりすすむという方針を採ることにした。

授業は1週間の内のたった90分、その何十倍もの時間を学生たちは授業外で過ごす。方言とはどこでも意識してさえすれば情報が飛び込んでくるものである。この授業で目指したのは、ずっと考え続けることであった。そのためには、今日新たに知った方言を使ってみる、今日の授業で授業者から提示された情報に対して本当にそうなのかを身近な人に聞いたりして検証してみるなどの方法で考え続けてもらうことが必要である。

毎回、左のスライドのような課題を提示し、その内容を次の回のアンケートに記入させることにしていた。当然、その方言観察は成績評価に反映させることは、最初の講義で説明し、その通り実施した。毎回、この観察を怠っていた学生何名かは、レポートのできも相関して悪く、非常に悪い成績を取ることとなった。

今回はこのように33枚のスライドを用いた。そのほとんどにはアニメーションを用い、さらに地図をはじめとして、遠隔授業ならではの見やすさを確保するための作業を大量に行った。多くの時間が費やされたことは言うまでもない。

3. 問題点とその改善方法の模索

今回の授業においては、下記4つの要因が絡み合い、下方向へのスパイラルが形成されていったと授業者は率直に感じている。

まず、授業者自身、このような授業を担当するのは初めてで慣れておらず、さまざまな対応能力の不十分さがあった点である。第2に、INUC側の担当者が大きく入れ替わり、昨年度からの継続性が十分ではなかったことに加え、緊密な連絡が取られていなかったことも大きい。第3に、岐阜大学が責任を持って送り出す授業として、責任の所在が明らかでなかった点も不幸なことであった。結果として授業者の責任に矮小化された感は否めなかった。最後に、経費などサポート態勢が、結果としては過分に得られたものの、決定が後手後手に回り、ほとんど自分の研究ができないほどにたいへんな思いをして授業運営に対し努力しても報われないという思いに常に授業者は苛まれた。

以下、具体的な事象を指摘し、どのような改善方法の模索が可能であるか、簡単に提言をしていきたい。

3.1 資料作成上の問題点とその改善方法の模索

パワーポイントで12回の授業分の資料を作る。これは、それほど簡単なことではない。

もちろん、分野によって大きな違いがあることも事実である。著作権の問題には後で触れるが、その問題さえクリアされていれば、写真や理論の概要だけを示せばよい理系とは異なり、人文科学、とくに言語を扱う領域では、パワーポイントのスライド上でも、ことばでことばを分析していかなければならない。その分析プロセスは、思考の節の数だけあり、それらを判りやすくパワーポイントという限られたスライドスペースを利用して提示することは、授業者以外の人間が想像しているほど簡単なものではない。

提示される内容の難しさは、分析プロセスをスライドの中に入れていくことで少しは容易にできると授業者は考えた。そこで、アニメーションと呼ばれる機能を多用して、順番に変化の過程を説明することにも努めた。2.5節に示した授業内容のうち、 DEALからダ、ジャ、ヤが生成される過程、およびそこからダロ(ウ)、ダラ、ヤロ、ヤラなどができる過程は、1枚のスライドで提示し、指示棒やレーザーポインターで示すことも可能であろう。事実、理系のシンポジウムなどではこの手法が使われていることも目にする。しかし、授業は、学生達が考えていくプロセスを支援することが大切である。特に教養教育という大学1年生に対して学問の入口となる講義で、すべてが最初に提示され、考える間もなく説明が施されていくのでは、思考力は育たない。やはり、授業においては、段階を追って考える補助的な位置付けとして、パワーポイントが利用されるようにしなければならないのではないか。

アニメーションの他にパワーポイントの技術面について苦労した点は、1枚ごとのスライド構成であった。すでに述べたが、さまざまな配色の中で、白地に黒文字は、モニター画面では最上の見やすさではない。背景を青に、そして文字を黄色系統に統一していきつつ、強調したい部分をハイライトにしたりすることは試行錯誤の連続であった。

授業者自身が、2003年度から3年間、年2回ほど継続的に行っているオーストラリア・シドニー大学への国際遠隔授業（これもINUCに配信する英語の授業のバーター的存在）の経験はあったものの、15回の講義すべてを遠隔と目の前の受講者（しかも144人の大学生）両方に対応する授業などは行った経験もなく、ほとんど半年間、ほかに仕事ができないほどの忙しさを抱えることとなった。

確かに、パワーポイント作成については、補助の学生がINUCの予算でつけてもらえた。しかし、補助学生に委託できるのは、すべてのスライドに対して細かく指示を出し1つのファイルを作成するまでには到底及ばない時間数であったことと、パワーポイントを熟知した学生を見つけることは教育学部という院生が比較的少ない学部においては難しいことの2つの要因があり、結局は授業者自身のパワーポイント作成に関する作業量は大きく残ることとなった。

パワーポイント以外の地図など資料作成に対しても同様に、もっとサポートが必要である。今回の授業に関してより分かりやすいスライドを作るために、既製の地図を改変し色塗りをすることにも多くの時間を費やした。コピー(スキャナーでの読み取り)にお絵かき・塗り絵(Photoshop等画像ソフトでの加工)、これが大学の教員が、思索時間を削ってやることなのかと欲求不満を抱えながら、思うように使えないコンピュータソフトと格闘しながら1枚1枚の地図を仕上げていった。この方面に明るい学生なり大学全体からの技術的なサポートがもっとあれば、自由に使える時間はもっと多かったであろう。コンピュータの性能が、昨年度の国際遠隔授業経費により上がっていたことは不幸中の幸いであった。

このような現状をふまえ、当該授業の開講枠である教養教育を統括する教養教育推進センターならびに、INUCとの橋渡しを学内的に行っている学務部に対し、全学的にコンピュータ操作に比較的長けた学生・院生を登録した授業資料作成補助機関の設立を要望として提出した。教育学部では、現在、遠隔大学院の講義科目収録のためにMCRという機関でそのサポートを行っている。全学的にもそのような機関があることによって、教養教育の授業を配信することに困難さを抱える教員が減ることは、今後の大学間単位互換提携のために不可欠な措置であると考えられる。

また、このような授業サポート機関の充実が実現されれば、多く、個人研究費でまかなわなければならない図版等の作成ソフトも一カ所に集約されることとなり、また、蓄積されたノウハウの活用によって、担当教員個人の時間的な負担も大幅に減じられるであろう。

ともかくにも、資料作成について、授業者個人の負担に大きく依存してなりたっている授業は永く続かない。送り出す手段のために増えた作業については、その作業の補助を組織として支援することが必要ではないか。

3.2 授業で用いる資料内容の問題点とその改善方法の模索

すでに触れたように、大学の授業は公序良俗に反しない限り、どのような資料を授業内で用いようと、著作権という観点から問題になることはない。しかし、インターネット回線など、外につながれた授業となると大きな問題が生じる。

現行の著作権法が、ネット配信など新しい形式での授業を想定していないことは確かに大きな問題である。今後、大学や県などの単位で、このような共同授業あるいは単位互換をインターネットを通じて行うということを企画するのであれば、著作権法改正に対し適切な提言を行うことも含め、この問題の解消が不可欠である。

当初、INUC側からは、著作権についての問題については授業者が責任を負うという旨の書類が提示されサインを求められた。しかし、当該授業では、実際にテレビ等で放映されたさまざまな映像資料を用いる可能性が高く、サインをすることを保留せざるを得なかった。そもそも、そのような法律上の問題に対し、授業者個人の責任として捉えることは適切であるのか。授業外の授業配信というシステムの問題でもし著作権法違反の責任が授業者個人にあるという責任所在の矮小化がなされるのであれば、だれも危険を冒してまで授業をやることはないであろう。授業者個人の犠牲だけを前提になりたっている授業はなされるべきではない。

この問題の解決に対し、授業者としても手をこまねいてみてきたわけではない。方言という生身の人間がいてこそ得られる素材である以上、音声素材も必要であるが、さらに映像教材は非常に大きなインパクトを有する。どのような土地で、どのような年齢の方が、どのような身振り手振りを添えて語るのか。音声だけよりも、映像は多くの情報を与えてくれる。それらを自前で用意していくことは、この授業内ではほとんど間に合わなかったが、授業終了時以降、夏休みや秋の方言調査時には必ずビデオカメラを持参して、その都度、学生たちに見せてやりたいから使ってもよいかと撮影の許可をもらって、映像資料を取りためてきた。

しかし、素人が1人で収録する映像資料は、プロの仕事にはかなわない。新しい時代の授業形態に合わせて著作権法の改正など環境を整備していくことは、授業者個人が解決できる問題ではなく、その授業を行おうとしている機関こそが解決すべき問題である。大学あるいはINUCが機関として、時代に合わせた著作権のあり方を求め訴えていくことも必要ではないか。

3.3 学生に対するサポートの難しさとその改善方法の模索

今回の授業で、授業者としては、だれに対して授業をやっているのかという点で、目の前の学生に対する注意が散漫になったという反省点が強く感じられ残った。これには配信のためのテレビカメラによる授業収録という要素が大きく関わっている。

まず、教室が101という400人収容の教室に限定されたことが挙げられる。101教室には教壇背後に収納スペースがあり、そこに収録用機材を収納しておくことが可能である。このような収納の都合によって、150名程度の受講者に400人教室という規模のアンバランスが生じ、結果として、目の前の学生に対して十分に目の行き届かない印象を授業者自身が強くもつことになった。目の前の学生に目の届く適正な教室規模は授業の基本ではないか。

教養の授業が求められる方向性として少人数できめ細かい授業ということがあるとすれば、このような他の要因によって注意が散漫になる環境を強いられるということは、やはり解消されるべき問題であろう。今後このような遠隔授業の教室を整備していく必要が、岐阜大学にはある。

目の前の学生に対するサポートが不足した原因は、カメラ収録による立ち位置の制限ということも関係していた。学外受講者のビデオ視聴という手段によって科目を提供する以上、当該授業はテレビカメラによって収録されなければならないが、実際にテレビカメラに追われた授業を行ってみると、授業者と受講者との距離は予想以上に広いものとならざるを得ないことにも気づく。左右には動く

は言っても、基本は固定であるテレビカメラの画面から、たびたび消えるわけにもいかないため、授業者はほとんど壇上に固定される。

このような形式は、やはり基本的にはシンポジウムなど、聴衆の側に非常に強いニーズがあり注視する姿勢が伴っている場合には有効な手法であろうが、教養の授業などには到底向かない。より多くの学生に届く授業を行おうとすると、授業者が壇上にいる時間はより少ないことが欠かせない要素となってくる。テレビカメラによる収録によって、受講者の顔が掴みにくくなったということが、授業者にとっては重大な問題となった。テレビカメラを2台にし、教室全景も得られるようにしなければ窮屈である。

目の前の学生との十分なコミュニケーションを得られない授業は、いい授業とはならない。**学外へ配信する授業は、やはり学外への配信を意識として主に置いた作りかたがなされるべき**であろう。いっそのこと、大学内の受講者も画面の向こうにいるかのごとく、会場内でのインタラクティブな度合いをまったく無くしてしまえば、一方向に集中できるのかもしれない。しかし、それはすでに教養の学生に学問のおもしろさを伝えられるような伝達方法とは言えないであろう。

さまざまな大学に専門家がいたる教養の授業をインターネットを利用して県内の大学で共有する。このことは、科目という横の広がりについては正しい方法であるが、学生に対して責任をもって対応していくという深まりの点においては、現段階では十分に機能しているとは言い難いのである。

このような学生に対する責任の取り方を保管するものとして、インターネットによるサポートシステムがあるが、これにもさまざまな問題があった。

岐阜大学の学生に対してはAIMS-GIFUという学内専用のシステムがあり、INUC受講者に対しては同様のシステムが別に存在する。これは授業者にとって非常に負担である。本授業では好むと好まざるとこれらのシステムを利用せずにはいられなかったが、行った作業はたいへんなものであった。

まず、毎週、両方のシステムに、授業資料の貼り付けを行い、受講者に対してアナウンスを行う。やりかたの違いには慣れはするが、**INUCの学外受講者がAIMS-GIFUを利用できるなど、1つの方式に統一されていれば負担は軽減される**。また、INUC受講者からの問い合わせは、授業者にメールで届くわけではない。掲示板をチェックして応えなければならない。定期的にアクセスするのも、システムが複数になれば面倒なものである。将来的には、システムの統一も視野に入れ改善はできないものであろうか。

そもそも、それぞれのインターネットサポートシステムはそれぞれに使いにくい点を含んでいる。AIMS-GIFUは文字化けが当初あったり、階層関係が掴みにくいものであったり、決してすべての人にやさしいデザインとはなっていないし、INUCのシステムは受講者の声が授業者には届きにくく、また過去の書き込みが一定期間を過ぎると閲覧できないなど、やりにくいシステムとを感じる点があった。おそらく管理者側には十分なシステムなのであろうが、やはり、ネットによるサポートシステムは、作る人のリテラシーレベルで多様な使用者に使わせてはならない。使う人のレベルで作られていなければならない。なぜならば、このようなサポートシステムは授業改善のための1つの手段でしかなく、ハードルが高ければ十分に活用されないからである。**インターネットサポートシステムのユニバーサルデザイン化、これも課題であろう**。

岐阜大学以外の受講者への対応、特に単位認定をしなければならない他大学の学生の受講確認については、予想以上の手間がかかった。

まずレポートの形式は、当初、岐阜大学の学生と同じものにして、それをINUCのインターネットサポートシステムからダウンロードし、メールでINUCに送り授業者に転送されるという方式をとっていた。レポートのインターネットサポートシステムへの貼り付けなどは、INUCの担当者の手によってなされたが、返送されてきたレポートを毎回チェックし、出席を確認していくことは、言うほど容易ではない。授業日から10日から2週間程度でレポートを返すようにと通知してあっても、さまざま

なトラブル、たとえば何らかの要因で各自の大学での閲覧が可能ではなかったとか、教科書が届いていないために課題ができないなど、何週間にもわたってレポートが滞ったかと思えば、まとめて送られてきたりすることもあった。電子的なやりとりは紙の場合よりも労力を要する。

また、授業時間内教室に存在することが受講と認められる岐阜大学での受講生と異なり、INUC経由での学外受講者には、授業内容をつぶさに聞いていないと回答できない方式の出席確認が必要である。途中で、教科書ももたずほとんど内容を聞いていないことがわかるレポートが複数送られてきたことにより、結局、出席確認も、岐阜大学会場受講者用と学外受講者用との2種類を用意せざるを得なくなった。

遠隔授業がインターネットサポートシステムを必須とするならば、そのサポートシステムは、単に、あるから使えというものではなく、受講者・授業者ともに使ってよかったと思えるものであってほしいものである。

3.4 経費負担ならびにインセンティブ経費のより好ましい支出

今回の共同授業に関する経費負担ならびにインセンティブについては、当初、INUCからの消耗品供与のみであったが、結局、他に2点付くことになった。それは学長裁量による岐阜大学活性化経費(教育)とINUCからの「手当」であった。しかし、これは最初から決まっていたものではなく、時間軸に沿って見ていく必要がある。

4月の授業開始時以前、INUCは、補助学生の雇用と必要な物品の消耗品としての供与は行うが、それ以上の経費やインセンティブは認められない。これが、当初の共同授業における条件であった。

当該の共同授業は、何より岐阜についての内容を求めるというコンセプトのもと山田に投げかけられてきた提案であった。経費云々よりも、まず、自分自身が考えていることを多くの人に話す機会が得られることが、まずは授業者としても歓迎された。このことは、過去にも岐阜県メールマガジンというものに、10回にわたってまったく原稿料無しに方言に関する記事を提供してきたことからもお分かりいただけるであろうが、偽らざる思いである。格好良く言えば、あまり文化的なことにお金を掛けない「岐阜県」にあって、岐阜のことをもっと多くの人が学ぶ風土を作っていかなければ、この県は住人から愛される県になっていけないという思いからである。

このような思いがあって始めたものであるとはいえ、授業者が担わされた負担に見合う適切な支出はやはり必要であった。しかしながら、消耗品は単価が非常に低いものに限られ、映像や画像を加工するソフトはINUCの想定した消耗品金額の上限に入らないものであり、他の研究費で都合を付けざるを得なかった。やはり必要なものは必要なものとして供与されるべきではないか。それらはゲスト講師の謝礼の何分の一にしかないのだから。

消耗品については、その発注方法にまでやや問題があった。授業の前年度、準備のために、補助学生に貸与されるパワーポイントのソフトおよびフラッシュメモリーなどを、授業者が大学生協で発注し県に支払い請求を行うという形で購入することが求められた。生協からの請求書にミスがあったこともあり、何度も生協窓口で掛け合うことまでさせられることになった。また、その他の消耗品の購入は、使用可能な上限金額が決まっていない中で、いわば顔色をうかがいながらの支出請求であり、決して気持ちよく使える経費ではなかった点も不満として感じられた。

4月以降、授業時になって気づいたこととして、補助学生の雇用に関し1ヶ月ごとに出役票としてとりまとめINUCに送付しなければならないが、その送料も、当初は授業者の「持ち出し」が想定されているということがあった。たとえ少額であろうと、共同授業を提供することにともない、個人の研究費に負担を求めるシステムになっていること自体がおかしなことであると感じられた。結局、交渉して送料の捻出を認めてもらうことになった。

その後、授業期間が半分過ぎた6月頃、学長裁量による、岐阜大学活性化経費(教育)に採択され、

550,000円の予算が認められた。時期的な問題から、活性化経費は主に次年度のために、授業期間内に必要性が強く感じられるようになった映像資料収集へとシフトして使うこととなった。

さらに、授業が終わり後期に入った段階で、著作権問題のクリアーが難しいとの理由によって、次年度の開講を取り止める決定がなされた。ほぼ、時を同じくして、当初インセンティブが付かないことになっていた共同授業にも、単位互換開講科目と同様に、一律3万円+受講者ひとり当たり千円の給金が払われることとなった。

大学の中で特に負担が大きい教員に対して払われるのがインセンティブであるとするれば、そのインセンティブは担わされた負担の解消にこそ使われるべきである。今は研究室付き事務職員も存在せず、文系講座に助手が置かれる世の中でもない。ましてや秘書など望むべくもない。教員の研究時間を削ぎ取って負担が強いられていることを、せめて授業実施機関側としてバックアップしてほしいものである。予算がなければ、せめて授業者のやっていること・やろうとしていることを十分理解し言動にも十分配慮してもらえれば、これほどひとりで抱え込まなくてもよかったのかもしれない。

実際に、活性化経費は当初の予定からの変更を含め、次の年度によいものを送り出すために使うことを考えていた。取りためた映像などは、次年度の教養科目の中で活かされることとなるが、経費申請時に添えられた理由とは大きく異なるものとならざるを得ないこととなった。

5. おわりに

共同授業には岐阜という場所ならではの講義を出したいとの求めに応じ、岐阜の方言に関する講義としては、学問的にも充実した内容で、そして何より大学入学時に学問の楽しさを学生たちに伝えるために、個人の能力の範囲において現時点での最良の授業を目指して、懸命に取り組んできた。しかし、現実には、授業期間中は、ほかの研究がほとんどできないほどに時間が授業準備に費やされた。パワーポイント資料作成技術修得と遠隔授業ならではの工夫、遠隔のみの学生十数名を含む平均160名近くの学生への成績評価を含む対応、そして授業内容の発展。授業者が中心となってこれらを背負うのには限界がある。先手を打った（そして何より心のこもった）より厚いサポートが必要である。

授業者としては嬉しいことも2点あった。1つは、3人とはいえ、ゲスト講師からいい話が聞けたことであった。それよりも何よりも、17年度前期人文科学分野で、100人を越える教室で唯一、講義内容に対する高い評価が学生から得られたことは、授業姿勢や方向性の確認ともなったし、次年度への活力になるであろう。もう1つ、IllustratorやPhotoshopといったデザイン系のコンピュータソフトがうまく使えるようになったこともつけ加えるべきであろうか。

教育学研究科として近々に始められる大学院講義のインターネット配信など、今後、同様の遠隔教育はますます増えていく方向にある。新しい技術が必要となり、ますます多くの教員があらたな負担を求められる。時代の要請する方向性としては理解できるが、負担が過大なものになりすぎないように、よい方法によってよい内容の授業が提供されていくことを望みたい。

【付記】

本研究は、平成17年度岐阜大学活性化経費（教育）による研究成果の一部である。

本研究に対し支出された経費は、講義開始前の申請時との状況の変化によって大幅に支出項目が変更された部分もある。それらはすべて次年度の内容を考えて変更がなされたものである。

申請予算は次の通りである。

品名・仕様	単価(税込み)×数量	金額(税込み)
方言文法地図第5巻および第6巻	¥40,000×2	¥80,000
方言関係書籍	一式	¥120,000
東濃地方方言調査旅費	5回程度	¥30,000
方言イベント調査旅費	広島県甲奴郡2泊3日	¥70,000
画像・映像・音声加工ソフト (Adobe Illustrator CS, Photoshop CS, Bias Deck, Apple Quicktime Pro 7等)	一式	¥100,000
資料作成・データ入力アルバイト	¥860×50時間	¥43,000
研究成果 (ca. 150pp.)刊行費+送料	×100冊	¥157,000
合計		¥600,000

実際には採択件数の都合で¥550,000に減額されて採択された。実際の執行金額は次の通りである。

品名・仕様		金額(税込み)
方言関係書籍	9点	¥42,585
方言調査旅費	岩手県花巻・遠野地方	¥97,530
方言データ収録・加工装置およびメディア	ビデオカメラ, 予備バッテリー, ペンタブレット, DVDメディア	¥150,980
画像・映像・音声加工ソフトおよび同教本	(Adobe Creative Suite CS2 含 Illustrator CS, Photoshop CS)	¥78,338
方言音声資料CD	47点	¥84,600
研究成果 (ca. 180pp.) 刊行費	100冊 (予定)	¥95,967
合計		¥550,000

予算変更の大きな理由は、3.2節で述べたような自前での映像教材の整備のためと、音声資料の充実のためである。なお、広島県での方言イベントは2005年度行われず、かわって方言による民話を使って町おこしをしている岩手県遠野地方ならびに方言での著作もある宮沢賢治の古里花巻への調査旅行に切り替えた。方言文法地図第5巻ならびに東濃地方調査(3回)は自費によってまかなわれた。

【参考文献】

- 岐阜大学国際遠隔教育研究プロジェクト(編) 2004『ストリーミング配信技術を用いた遠隔授業に関する研究』産官学連携共同研究成果報告書
- 山田敏弘 (2004)『みんなで使おっけ! 岐阜のことば』まつお出版
- 山田敏弘ほか (2005)「テレビ会議システムを用いたシドニー大学向け日本語授業の実践報告」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践編』7